

3.4 維持管理の現状と課題

九頭竜川水系では、大臣管理区間として九頭竜川、日野川の約42km区間、足羽川、上味見川、部子川の17.4km区間ならびに九頭竜ダム、真名川ダムの50.38kmの貯水池区間において、河川巡視及び河川管理施設の操作、点検、補修等の維持管理や河川占用の許認可、水質事故対策、ゴミ等の不法投棄対策などの適正な管理を日常的に行っている。

3.4.1 河川管理施設の機能保持

3.4.1.1 堤防・護岸等の管理

堤防・護岸は、施工された年代及び使用材料等が異なることが一因として、堤防天端の亀裂、法面崩壊、護岸のひび割れ及び堤体内部の空洞化による陥没等が発生する恐れがある。このような事態が発生すると堤防機能が低下し、洪水時には堤防決壊(破堤)等の災害につながる為、日常的な河川巡視及び河川管理施設の操作、点検、補修等の維持管理に努めている。

堤防や高水敷の除草は堤防法面の崩壊等の有無を日常的に確認する目的で行っており、河川管理施設が洪水時に正常に機能するよう洪水期前(梅雨時期)、台風期前を目途に実施している。

堤防や高水敷の除草は現地焼却により処理してきたが、発生する煙の沿川住民への影響を考慮し、現在、約43%のリサイクル処理を行っているが、この処理費用も近年増加しており、コスト面で課題となっている。

また、兼用道路、公園など占用管理者に除草を行うよう指導しているが、除草の時期や回数が合わないなど問題も生じている。

3.4.1.2 河川構造物等(水閘門・排水機場・樋門等)

九頭竜川水系では、大臣管理区間として九頭竜川、日野川には約180箇所の樋門・樋管等があり、そのうち約1割(17箇所)が河川管理施設となっている。

施設の機能維持のため、毎年出水期前に施設の点検を行い、補修等を計画的に進めている。そして出水時には迅速な対応と確実な操作を行っており、そのための講習会についても毎年行っている。

一方では操作員の高齢化の問題もあり、樋門等の遠隔監視・操作も含めた管理体制や樋門等の省力化・電動化などの課題もある。



図3.51 流域図



図3.52 パトロール



図3.53 塵芥処理



図3.54 出水期前他、年18回点検

3.4.1.3 許可工作物

河川管理施設等構造令に適合していない橋梁や樋門等があり、出水時に治水上重大な影響が出ないように架け替え、補強等改善指導を継続していく。

3.4.2 河川区域の管理

鳥類や魚類にとって良好な生息場所を提供している中流部の河道内樹木群については、河川環境の保全に配慮しつつ、伐木には多大なコスト増も考えられるため、伐木計画を検討し、災害防止の観点から樹木群の拡大防止等適正に管理する必要がある。

九頭竜川河口付近には小型船舶の不法係留が顕在化しており、洪水時に治水上支障をきたす他、「観光の町三国町」の三国港の景観や河川環境上も問題となっている。平成14年の調査では九頭竜川228隻、竹田川161隻合計389隻の不法係留船が確認されている。

河川区域及び官民境界については、国有地と民有地との境界が不明なために治水事業及び河川管理上支障ある場合または民有地の所有者から河川との境界確定協議の申し出があった場合に、境界確定作業を行っており、平成14年現在で境界の明示・確定済延長は全体延長86,630mに対し、72,690m・約84%となっている。今後も、河川区域及び官民境界を明確にすると共に関係機関と協力し、監視・指導を行い、構造物の設置なども含め対策が必要となっている。

河川敷地内においてゴミの不法投棄がある。地域の方々の協力を得て清掃活動を実施し、巡視を強化しても後を絶たない状況となっている。今後、更なる地域との連携や巡視体制の検討が課題となっている。

適正な河川利用を図るため、「九頭竜川水系河川環境管理基本計画(H2.3)」「九頭竜川水系河川空間管理計画(H2.3)」に基づき、公園の整備・占用、桜づつみモデル事業の推進・整備、水辺へのアクセス性の改善・整備、河川愛護活動をさらに充実していくなど、関係機関や地域住民との連携を一層進め、計画的な対策を講じる必要がある。



図3.55 河口付近に約400隻の不法係留船



図3.56 ゴミの不法投棄



図3.57 公園利用

3.4.3 ダム・堰の管理

3.4.3.1 ダムの管理

九頭竜川水系のダム群(九頭竜ダム、真名川ダムなど)は、社会要請に応えるべく、治水、利水に対し、その役目を果たしてきた。

両ダムの管理支所及び統合管理事務所では、流域内の水文・気象・ダム諸量・映像等のデータを収集するとともに計算処理、予測を行い、出水時等における適正なダム操作を行っている。



◇九頭竜川鳴鹿大堰

洪水時におけるダム管理上の課題として、放流開始時に河川利用者に避難するよう指導しても、避難しない人が多い。そのため、関係機関とも連携したより一層の避難誘導、わかりやすい放流警報の工夫が必要である。また、洪水時にはダム湖内に大量の流木・土砂等が流入し、管理上の問題も発生している。

ダムは、河川管理上非常に重要な施設であるが、両ダムとも建設以来20年以上が経過し、老朽化が見られる設備もある。ダムの機能を確保するため、情報通信機器並びにゲート等の機械設備を常に良好な状態に維持することが重要であり、定期的な点検・診断を行うとともに、計画的な維持補修対策を継続して実施する必要がある。さらに、ダムに対する理解と協力を得るため、日常からの情報提供、上下流の交流や水源地域の活性化に向けた施策を実施していくことも必要である。



3.4.3.2 鳴鹿大堰の管理

九頭竜川鳴鹿大堰は、H2年度より建設事業に着手し、H15年度に完成した。本体ゲートには、日本初(長大径間)の油圧直吊方式を採用し、維持管理の軽減を計っている。一方で、中流堰であるため、出水時における、堰操作、巡視等の堰管理に要する時間が長期にわたることもある。施設(土木設備、機械設備、電気設備、制御設備、観測設備など)については適切な状態を維持・継続する必要がある。また、九頭竜川の生態系を損なうことがないように階段式魚道に併設して人工河川式魚道(斜路式)を設置し、全ての魚類の遡上を可能とした

◇九頭竜川鳴鹿大堰の魚道

